

## ◆平成 22 年度 第 2 回（通算第 14 回） 蔵前ゼミ 印象記◆

日時：2010 年 5 月 28 日（金）

場所：J221 講義室

### 公認会計士の職務から見た社会

前川 健嗣（2001 生物，2004 経営修）前川健嗣 公認会計士事務所 所長

レモンを背景にしたスライドが さわやかな話の内容と一致して 印象的だった。勝間和代こと“カツマー”も公認会計士で、何と 19 歳で難関を突破した天才少女だったらしい。こう聞いて、さっそくネットで調べてみた。前川さんのスライドでみた勝間さんの方が良かったような気がするが、経済評論や文筆活動を通して公認会計士の使命（国民経済の健全な発展に寄与すること）を果たしている人だと分かった。変わり種としてもう一人、山田真哉が紹介されたので、これもネットで調べてみた。2005 年に出版した『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？』がミリオンセラーになったようだ。この題名なら、中身がなくても飛ぶように売れそう。本の中身より、誰が題名を考えたのか知りたくなった。もうひとつ、私の田舎では竹竿（たけざお）といって、そこら辺の竹林から適当に切り出して使っていたが、節から出る小枝を落とし、きれいに仕上げるのは手間のかかる仕事だった。

日本には 現在 約 2 万人の公認会計士がいて、そのうちの 1.7 万人が大手の監査法人で働いているそうだ。自分の職業を説明するのは意外と難しい。私もよく「何しているの？」と聞かれるが、甥や姪だと簡単には納得してくれない。最後は「へー、でもどうしてそんなに忙しいの」といわれてグーの音も出なくなる。前川さんも苦労したのだろう。小学生にも分かるような説明を考えてみましたのでお聞きくださいといって公認会計士の説明が始まった。

前川さんが 例えて いわく： 15 世紀から始まった大航海時代には、香辛料は重さにして金と同じ価値があった。そうすると、船を造って船主となり、船員を雇って インドに航海し 香辛料を持ち帰れば 大儲けができる。しかしそのために必要な大金を一人で借金するのはリスクが大き過ぎる。船が難破したら全てを失う上に、莫大な借金のみが残るからだ。そこでまわりの人たちを誘って少しずつお金を出してもらえば、仮に船が沈没したとしても、少しずつの損で諦<sup>あきら</sup>めのつく話となる。これが会社だ。しかし 船主が嘘<sup>うそ</sup>をついて 自分の取り分を多くしているのではないかと心配になる。

そこで必要になるのが、独立で利害関係のない会計士というわけだ。公認会計士は会社の成績表を作る人といってもいい。公認会計士は出資者のみならず経営者側から見ても不可欠だ。第三者に信頼性を保障してもらえば、次の資金繰りが 楽になるからだ。こう説明されれば公認会計士の仕事と必要性がよくわかる。前川さんの よく練られた説明を聞きながら、さすが前川さん、腕利きの公認会計士になる日も遠くないと思った。

前川さんは、1997 年に 研究者になることを目指して 7 類に入学した。ヒトゲノムプロジェクトが大きな成果をあげていた頃だ。バイオベンチャーも話題になっていた。このような雰囲気の中で、前川さんは 今後 バイオの世界で活躍するには、情報科学や簿記等の知識も必要だろうと漠然と思うようになったそうだ。卒業研究では、生物工学科の永井・和地研究室で微生物学を専攻し、抗生物質のスクリーニングもやったが、進路を決める岐路では、入学直後から何となく惹かれていた社会や会計とのかかわりに傾いたそうだ。熟慮に熟慮を重ねた結果というわけではなかったようだが、偶然の出会いで 人生の伴侶が決まることもあることを思えば これも人生の妙だ。

大学院は社会工学専攻に進み、本格的に会計士を目指すことにした。会計士になるための受験勉強と大学での研究を両立させることは至難の業だ。前川さんも苦労をした。<sup>(注 1)</sup> 体力的にはもちろんのこと精神的にも限界近くまで追い込まれながら、4 年がかりでようやく一次及び二次試験に合格し会計士補として働き始めた。このような経験を通して 前川さんが後輩に伝えたいことは、①理系人材の選択肢は思っている以上に広いこと。それゆえ、普段から違った世界を覗いてみたり、いろいろな人の話を聞いてみたりする機会を作ってはどうかとのことだった。「会計士に向いている人はどのような人でしょうか」という質問に対しては、「地道に同じような努力ができる人」という答えだった。会計の仕事は実験と似ているようだ。

あと二つ 後輩へのメッセージがあった。いずれも前川さんの経験に基づく。②東工大卒に対する社

会の期待は大きいということだ。これは先輩が築いた東工大のステータスの高さを物語っているが、東工大卒として求められる水準も高いということになる。社会人として世話になった監査法人トーマツでは、(東工大卒の)前川の言うことなら聞こうとってもらえたそうだ。ありがたい話だが、期待を裏切った時の失望も大きいので、日頃からの精進が大事にちがいない。③困ったら先輩を頼ってみよう。前川さんは、会計士補として経験を積んだ後、2009年に三次試験をパスし、公認会計士として独立し自分の事務所を持った。現在、事務所を運営するかたわら、大学時代の専門を生かして、日本バイオインダストリー協会(JBA)と協力してバイオベンチャー等の支援をしている。**(注2)** 無償にもかかわらずこの仕事を続けることになったいきさつはこうだ。将来の顧客開拓を兼ねて、蔵前ベンチャー相談室の中島邦夫室長(1965 化工, 67 MS, 元通産省審議官)を訪ねた。中島さんは、前川さんの情熱にほだされ、その場で通産省時代の後輩で JBA の専務理事をしている人に電話をかけ面接のアレンジをしてくれた。もちろん JBA と関わりを持てるようになるかど

うかは、面接での前川さんのアピール次第だったわけだが、その場で電話をしてもらえたのは同窓生<sup>よしみ</sup>の誼だろうと前川さんは思った。恩義を感じた前川さんは、蔵前工業会「平成卒業生の会」**(注3)**の主要メンバーとして同窓会の発展に尽くしている。

**(注1)** 下記経験談を参照のこと。前川さんに苦労話を教えてほしいとお願いしたところ、手記を寄せていただいた。公表するつもりのものではなかったが、私自身いたく感動したので、就職活動で苦労している学生のためにと理由をつけて、掲載を許可してもらった。

**(注2)** 大学発のベンチャーを成功させるには、研究者集団のみで進めるのではなく、財務や経営の専門家にも加わってもらった方がいいとのことだった。

**(注3)** <http://www.kuramae-heisei.jp/>

## 目に見えぬ荒波にもまれた苦難の 会計士受験

(2010.5.30, MAEKAWA Kenji)

私は「過去の結果として」公認会計士という資格を持っています。大勢の前でお話させていただくときは資格の名前が前面に出してしまうため、元々会計士であったかのように思われる方が多いかもしれません。そして、今まで狙い通りの道を進んでおり、順風満帆の人生を歩んでいるように見えるかもしれません。

しかし、合格に至るまでの過程では、単なる無職の「会計士受験生」であり、不安と自信喪失の中でもがき苦しんでいました。こういった話は個別に相談を受けた時にはお話をさせていただくことがありますが、講演等の短い時間ではなかなか伝わらないと思いますので、今回は文章にしてみることにしました。書き始めてみると色々と思いだすことも多く、思っていた以上の長さになってしまいましたが、ご容赦ください。

《受験1回目…大学院 M2》

会計士の試験は5月に短答式試験(1段階目のマークシート式試験、足切り試験)があるため、M1のときはまだ受験をしていませんでした。このころはまだ自信满满で、1回目で合格し、学生なのに会計士資格を持っている自分を想像したりする余裕がありました。そして、初受験はM2の5月でしたが、東工大生なので短答式くらいは楽勝だろうと高をくくっていました。

結果は合格ラインより少し下の得点での不合格でした。大学院の授業やゼミに忙しかったから仕方ない、やっぱり難関試験だから1発合格は無理だったんだと考えることもできたのですが、自信が崩されると同時に周りの目が気になり、しばらくは落ち込んでいました。

悩んだ結果、中途半端な状態では研究室にも迷惑をかけると思い、退学届を持って指導教官に相談に行きました。このときは大学を辞めてスッキリしたいと思う気持ちがあったのも事実です。そんな心を見透かされたのか、少し時間をおいて考えて

みなさい、もし試験に専念したいなら休学してもよいのだからとのアドバイスをいただき、卒業を1年遅らせる代わりに半年間大学には通わずに試験に専念することにさせてもらいました。

《2回目…大学院 M3》

半年の休学期間の後に、2回目の短答式試験を受験しました。受験に専念したのだから今度こそとと思っていたのですが、今回も合格点ギリギリで不合格でした。このときの不合格は非常にショックでした。今までかろうじて残っていた自信も消え去り、足切り試験で不合格になってしまう自分の能力について、疑念と不信を抱くようになりました。

また、同級生が社会人や研究者として活躍し始めていたころでしたので、彼らとの比較で、ますます自分への自信を失っていきました。結果、人に会うことを避け、外に出ることも少なくなりました。このころは唯一のよりどころである「難しい会計士試験を受けている」というよく分

からないものを逃げ道にして、周りの人にも迷惑をかけていたと思います。

一方で卒業のために修士論文を書かなければならなかったため、苦しいながらも研究室に行き、なんとか1年遅れで卒業させてもらいました。夜中に急に眼が覚めたり、眠れなくなったりしたのもこのころだったと思います。

#### 《3回目…大学院卒業後》

3月に大学院をなんとか卒業させてもらい、5月に3回目の試験を迎えました。大学院が終わってすっきりしたと思ったのは一瞬だけで、ここからは「無職」というプレッシャーと戦うことになりました。

会計士試験の怖いところは、犠牲にするものがあまりにも大きいため簡単に撤退することができないという点です。

始めたばかりの受験生はみな同じ考えなのですが、自分はすぐに合格するつもりでしたので、あまり気にはしていませんでした。しかし、本当の怖さを知るのは実際に2度の不合格を体験したこの時からでした。当たり前のことですが、既に新卒ではなく、20代後半にさしかかっていた自分に他の道を選択する勇氣は無く（変なプライドも原因の一つですが）、そのことがさらに自分を追い詰めていました。

試験の1ヶ月前くらいまではそんなに問題がなかったのですが、直前のまとめ講義を聴きに予備校に行ったときくらいから体が不調を訴え始めました。まず、予備校に行って講義を聴いていると急に動悸がしたり、予備校に向かう電車の中でめまいや立ちくらみがしたりするようになりました。最終的にはテキストを開いて読もうとすると頭の中で余計な考えが自分の意思と関係なく浮かび、目の前が暗くなるといった状態にまでなりました。こんな状態に、自分はなんて弱い人間なんだと情けなくなりました。また、試験会場でそん

な状態になったらどうしようものすごく不安になり、その不安がさらに状況を悪くするといった悪循環が続きました。

そんな状態で試験会場に向かいましたが、案の定不安は消えず、冷や汗をかきながらの試験となり、結局この年も合格ラインぎりぎりでの不合格となりました。

#### 《4回目…合格へ》

3度目の不合格後、しばらくはショックで立ち直れませんでした。周りの人の助けもあり、もう一度だけ挑戦することにしました。今度で最後にすると決めた以上、過去の失敗の経験を踏まえて覚悟を決めて臨みました。

まず、不安のもとを断つために予備校の模試では常に上位を保つようにして精神的な自信を維持し、毎日トレーニングをして体を鍛えることで身体的な自信も維持するようにしました。勉強面では毎日最低限こなす量を決めて、ランニングの合間に立ち寄る神社で必ずその日の勉強の報告をし、形式的でもいいから、家族や支えてくれている人への感謝をこめて手を合わせていました。今考えるとなんだか恥ずかしい気がするのですが、それでも多分続けることに意味があると信じて、文字通り雨の日も風の日も体調が悪い日も続けました。（この習慣は結局、合格発表の日までの500日以上続けました）

その甲斐あってかどうかは分かりませんが、その年は短答式試験に合格することができ、その後の論文式試験もまったく不安なく挑戦することができました。「練習は自分を裏切らない」と言っていたスポーツ選手がいましたが、まさにその言葉を実感できた時期でもありました。

論文式試験後も、不合格だった時のことを考えて今まで通り勉強を続けていましたが、幸いにしてその予測は当たらず、その年に合格することができました。

#### 《最後に》

公認会計士試験は、人によっては1年の勉強で合格することもありますし、10年近く頑張っようやく合格することもあります。しかし、人によって受験期間は異なるとしても、大半の合格者が私と同じような経験をしているのが実態ではないでしょうか。私の監査法人時代の同期の一人は、入社直後に監査法人のオフィスからの夜景を見て「涙を流した」そうです。彼も合格までに5年を要しているのですが、受験中に会社案内に載っていたオフィスからの写真の切り抜きを勉強机に貼り、受験に失敗するたびに一人その写真を見ながら「絶対にここで働くんた」と歯を食いしばっていたのだそうです。そして、それが現実のものになった時に思わず涙が出てしまったそうです。

私の話も、彼の話も、他の人から見たら恥ずかしい話かもしれませんが（現在の私が見ても恥ずかしいので…）。しかし、先述したとおり、会計士になる人の大半は同じような経験をしているといっても過言ではありません。会計士になったとたん、始めから会計士だったかのような顔をしているかもしれませんが、皆若くて楽しい時を犠牲にし、やりたいこともほしいものも我慢してきた過去の結果として公認会計士になっているのです。さらに言えば、合格者と同じくらいの努力をしても合格できなかった人が、合格者の10倍以上いるのです。

公認会計士の表の面（合格後の姿）だけを見ることは簡単ですが、裏の面（合格までの過程）に目を向けてもらうことも意思決定上、非常に重要だと考えます。しかし、残念ながら過去の話を大勢の前で告白する会計士もなかなかいないと思いますので、恥ずかしながら私の裏の面を書かせていただきました。

私の職業柄、会計士受験の話にはなりましたが、OBの体験談として皆様のご参考にしていただければ幸いです。

## ----- 高度成長と電気事業 ---パラダイムシフトする未来に向けて--- -----

白土 良一（1962 電気 A）元 東京電力 副社長・現 顧問，前 電力中央研究所理事長  
-----

白土さんは「煙突のあるところ 蔵前あり」を地で行った人だ。次から次へと煙突のある火力発電所を作り運転を軌道に乗せた。火力発電所では消費電力に対応して発電量を調整（同期発電）しているが、これは口で言うほどやさしくない。発電所の建設が終わり、いよいよ立ち上げという時には制御装置を担当することが多かった。発電機はいったん動かし始めると止めるわけにはいかないので、3日間不眠不休ということも少なくなかった。一昔前の言葉でいえば、企業戦士・仕事好き・多忙好き・我慢の人だ。日本の高度経済成長期の典型的な企業人像は そのようだったと客観的に分析されたのだが、私には いい意味で 白土さんもそうだったに違いないと思えた。白土さんが代表例として挙げたのが、関さんだ。同窓会誌「蔵前ジャーナル Kuramae Journal」に必読のインタビュー記事がある。<sup>(注1)</sup>

川崎勤務 6 年に続いて 鹿島臨海工業地帯に移り、そこで 1~6 号機を手掛けた。計 13 年間、鼻の穴が黒くなるような現場一筋だった人が副社長になるには それなりのわけがあるに違いない。その芽は、大学に入る前から育っていたように思う。白土さんは、戦中に小学校に通った世代で、大学に入る時は旧制から新制に変わるときだった。高校の時は、朝 30 分ほど早く登校して、掃除をしたり冬はストーブの焚きつけをしたりのアルバイトをした。後楽園でアイスクリーム売りもした。売上高の 20%が収入となるので歩のいいアルバイトだった。このようなミニフリーター経験から、大学に行かなければダメだと思ようになったそうだ。一念発起して東工大受験となるが、当時は 17 倍の難関だったという。電気を専攻し、1962 年に上記サラリーマン生活が始まった。

発電所建設の現場は 寝ても覚めても 汗まみれの男集団の世界。何が起こるか分からない。プログラムで動くコンピュータの世界とは違い、嫌われたら上からボルトが降ってくる。まさしく 毎日が“専門プラス人間性”の勝負だ。守るべき期限もある。人に仕事をしてもらうのは 自分で仕事をするより何倍も難しい。研究室では、新人と経験者がチームを組んで仕事を進めることが多い。こうすると研究の能率が上がる上に チームプレイを通して 上記“人間性 leadership”も備わるのではないかと期待してのことだ。この習慣が薄れると

子育て放棄につながるので要注意だろう。

エネルギー関連の科学的・技術的な話も体系的になされたが ここでは省略する。なるほどと思ったことを 2, 3 あげておく。(1) 石油の埋蔵量は 2 兆バレルと推定されているが、それと同じ量の太陽光エネルギーが毎日地球に降り注いでいる。だとすれば、これをもっと有効利用したいところだが、天気まかせの太陽光発電には、弱点がある。電力供給系全体を一つのネットワークとして安定に稼働させるためには 同期発電システムが不可欠だが、気分屋の太陽光発電はこれに負荷をかける。負荷の許容範囲は、全発電量の数パーセント。まだまだ化石燃料に頼らざるを得ないのだ。しかも途上国で急増しつつあるエネルギー需要を支えるのも化石燃料ゆえ、日本が入手できる量は減っていくことになる。厳しい現実だ。「大江戸えねるぎ一事情」(石川英輔 著、講談社文庫)を読んで、低炭素社会について考えてみようとのことだった。関連して、TV に出ているという田中優子さんの紹介もあった。彼女も江戸通のようだ。(2) 東京電力は日本全体の消費電力の約 1/3 を供給している。中国では、毎年、東京電力 1 つの割合で電力消費が増えているそうだ。(3) 火山国日本なのに地熱発電が盛んにならないのはなぜか?との質問の答えはこうだった。量的にエネルギー源としては少ない; 温泉資源への心配から地元との交渉が難しい; 目詰まりによる管の交換等、コスト高で割に合わない。

結びの 後輩へのメッセージの部分は、PowerPoint に文章として綴られていたので、白土さんをお願いしてコピーをいただいた。以下の引用<sup>(注2)</sup>に目を通していただきたい。最後にポツンとおっしゃった「これからは、海外やマスコミへの説明能力も求められる」という一言が 私には重く響いた。東工大生が どちらかというと 苦手としてきた仕事だからだ。白土さんの分析にもあったように、社会一般の東工大卒に対する評価は「できるが、マイペース」だ。これにコミュニケーション力をつけなさいということだろう。それにはどうしたらいいか? 妙案はないが、よく考えてみると、毎日の研究室生活に全力を注げばいいような気がしてきた。先生を説得して やりたい実験をやる; 念入りに準備してセミナーをする; TRA (teaching and research assistant) の申請書を真

剣に書くということを繰り返していれば、説得力がつく上に信頼してもらえる。信頼のない饒舌よりも、口下手でも信頼された人の方が強い場合も多いと信じたい。一番いけないのは、その場しのぎを続けることだ。準備不足のレポートを出した後や適当にごまかしたセミナーの後は、反省して、次こそはと思うのだが、ついつい「喉元過ぎれば熱さ忘れる」を繰り返してしまう。自省の念を込めての述懐だ。いや自戒の念とすべきか。

(後輩へのメッセージの要点)

①マニュアルがないところで真価が問われる ②情報を鵜呑みにするな ③人間は機械ではない ④成長のスピードが速すぎないか ⑤目を見張るよ

うなインフラの変化に対応すべし(道を往来してコミュニケーションしていた時代から光通信の時代へ) ⑤残念ながら後輩に示せる将来の解(50年後の予測)はないとのことだったが、先行きの不透明さを心配してはいけない。菅直人首相ではないが、こういう時こそ東工大の出番だ。

-----  
(注1) KURAMAE JOURNAL No. 1019, 2010 (Early Summer), pp. 27--31. interview「今、活躍中の同窓生」千代田化工建設 相談役 関 誠夫 (S43 生産機械, S45 修士)

(注2) 1962 電気 A 卒業生からのメッセージ：下記

(生命理工学研究科 生体システム専攻 教授 広瀬茂久)

### 1962 電気 A 卒業生からの メッセージ

先輩から後輩へ：◆昔は自分たちがこの装置を動かしているのだという自負があった。その後 作業基準書が強化され マニュアルどおり作業することを強制されるようになった。特に労働安全面から作業基準書どおり作業しないと 上司も管理責任を問われるようになった。逆にアメリカでは、ある作業員が安全帽を被っていないので、なぜ被るように指導しないのかと聞いたたら、マニュアルに書いてあり、それを守るかどうかは本人次第で災害が発生しても自己責任になると説明された。現在、日本ではマニュアル優先で、自分が考えて仕事をするのが出来にくい環境になっている。◆ある国際規格の場合、日本は全く使い物にならない内容を提案してしまっているの、取り下げて訂正するか、危ないからこの規格値は使うなと注記するか、いずれにしてもまずは提案してしまった国内のバトルになる。海外は率直に理屈が通るが、国内では同調する人が居ないと駄目。日本発の規格も大いにやらなければいけないが、皆がプロになってくってからでないといけない。このようなエライ恥さらしが日本発とはねえ。恥と感ぜない人が多いのが一番困ったこと。◆「人間は機械で

はなく精神的な影響を大きく受ける」ことを再認識する必要がある。「現場好きな人間」に精神的な満足感、達成感を与えることが重要だ。土光さんは「仕事の報酬は仕事である。」と言われた。全力を尽くして一つの仕事を成し遂げて達成感が得られれば更に困難と思われる仕事に挑戦したくなるのが人間だ。◆鳩山政権の成り行きによっては失われた30年にもなりかねない。国力が沈滞すると 技術だけが進むワケには行かず 技術も停滞するのは当然だ。日本は歴史的には 外国から進んだ文化を取り入れ、長い時間をかけ、自家菜籠中のものとして完全に消化する傾向の文化だった。それが漢字許容の過程に典型的に表れている。◆しかし、この幸福な時代は永続せず。力によって有無をいわせぬ危機が訪れたのが明治維新で、この時 西欧の力をそのまま吸収した。つまり西欧文明は「人類普遍の原理」であるとされ、別に日本人が使ったからといって違うことではないと誤った思い込みが出来た。万能の手段と思ひ込んだものが、実は文化的には異質の存在であり、これを推進するエリート集団を支えるべき大衆はほとんど理解出来ない。この傾向が高度経済成長期にもグローバリズムとして続いた。◆リーマン・ショックさらにギリシャショックにより、グローバリズムは

影を潜め、欧米諸国は保護主義に向かおうとしているように見える。ちょうど大東亜戦争に乗り出そうとしていたとき、日本は単に欧米の後追いのつもりだったが、いつのまにかルールはがらりと変わり、侵略者の汚名を背負ってしまった。今回は2度目になるような気がする。◆ただし、1回目は悲劇、今回は喜劇の様相を呈すると思われる。◆現場力が落ちてきているのは現実の姿と同調しつつも、事実でないことを祈りたい。

おわりに (パラダイムシフトする未来に向けて)：●「成長のスピードが速すぎ、組織や人の成長が追いつかなかった」(トヨタ自動車社長、米下院公聴会にて) ●道路・ダム・水道・発電所・鉄道中心のインフラの時代から光通信・再生エネルギー分散電源の時代へとインフラの転換が起こっている。●我々先輩は将来の科学技術に答えを持っていない。従って「こうしたら良い」と言うアドバイスを持ち合わせていない。ただ言えることは：●いろいろな問題があることを知ってバランス良く、合理的、論理的にもの考える ●ミッションを常に意識して、めげることなく、一つ一つ問題を片づける ●海外やマスコミへの説明能力を磨く必要があるということだろう。